
パパアと、その孫

サダコレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ババアと、その孫

【Zコード】

Z4516E

【作者名】

サダコレ

【あらすじ】

リアルな話しながら、面白くないかもしれない匂いだ

(前書き)

フリー・ザと僕みたいな感じだわ

僕はこの前有給をとり、故郷に帰った。そこにてち受けたのは、小さな頃から僕を可愛いがつてくれてるフリをしている、イボのついたおばあちゃんだつた！

この物語は実話である。

おばあちゃんの家に着いたのは午後4時30頃。おばあちゃんは夕飯の支度をしていた。

ババア

「お帰りサダ」「レくん、久しぶりだなあ！今日は何が食べたい？なんでも好きなもんを言いんさい！」

これは小さい頃から聞いている言葉だ。僕は言ひ。

「久しぶりにハンバーグとお寿司食べたいかな。」

ババア

「それは買つてないよ。買つてあるのいいんかい？」

（なら聞くなつ！）

結局メニューはステーキとサイコロステーキに決まつていた。

ババア

「サダメレくん、ステーキのソースはかけてから焼くがええか？それとも皿にもつてからかけるがええか？」

僕

「皿にもつてからがええんじゃない？」「ん、やつじみつやおばあちゃん！」

ババア

「サダゴレくんは、よく知ってるからな～」

僕

「そんなことないで～」

そしておじいちゃんと楽しく会話をし、テレビで阪神対巨人を見ている時だった。

「ジユツワーッ！」

おばあちゃんはソースを早くも入れていた。

僕

「いやいや、おばあちゃん！入れたらいけんって話したがんつ！」

ババア

「やつぱいけんかったかサダゴレくん？」

僕

「うん。え？いや、話して決めたがん？」

じゃあなんで聞いたん？」

ババア

「へへへ～」

僕は殺意とこつものが心の中でわいてくる

のを必死で抑えた。

僕

「おばあちゃん、次のサイコロステーキは頼むで～」

ババア

「わかつどるよ～。ちゃんとやるよサダゴレくん～。おばあちゃん」と僕の長い戦いの幕が開けた。

次回に続く！

(後書き)

フリーザにはかなわんよ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4516e/>

ババアと、その孫

2010年12月21日14時52分発行